

福島県立安積高等学校

第131期生入学式 式辞

日 時 平成27年4月8日（水） 13：30～
場 所 福島県立安積高等学校第一体育館

式 辞 （本日は、あいにくの雨雲が、空の春を隠しておりますが、）

風が柔らかに薫り、桜の花咲き初める季節となり、川の流れも、大地も、空も、ここ安積野が生命のエネルギーに充ちあふれようとしております。

本日、県議会議長代理であります県議会議員勅使河原正之様を始め、多くの御来賓の御臨席を賜り第131期生入学式を挙行できますことは、誠に喜ばしい限りであります。

ただいま、入学を許可しました320名の新入生の皆さん、入学おめでとう。厳しい入学試験を見事に突破し、今は高校生活に対する大きな期待と少しの不安で胸が一杯になっていることでしょう。その喜びの陰にあって、ひたすら皆さんの健やかな成長を願い、ご苦労された保護者の方々、そして、親身になって叱咤激励していただいた小・中学校の先生方など、皆さんを支えてくれた方々のことを決して忘れてはなりません。

さて、本校は、明治17（1884）年、22歳の若き森鷗外がドイツ留学へ旅立ったのがこの年であります。本県唯一の旧制中学校として創立されて以来、今年で131年目を迎える、日本でも有数の歴史と伝統を有する高等学校であります。本校の卒業生は、約3万3,000名を数え、エール大学教授を務め、世界平和こそが人類の永遠のテーマであることを生涯訴え続けた国際的な歴史学者朝河貫一博士を始め、全国でも4校だけと聞いていますが、芥川賞作家を3名輩出するなど、様々な分野での活躍は枚挙にいとまがありません。

ここで、「第131期生入学式」という言い方に改めて注目してください。他の高校では「平成27年度入学式」又は「第何回入学式」とするのが一般的であり、「第何期生入学式」としているのは本校だけです。創立131年目に入学、同期生と共に、132年、133年と安積の時間を刻んでいく、そのことを強く心にとどめてほしいとの多くの先輩たちの熱い思いから、他に例のない言い方になっているのです。

この安積で、時間や言葉・記憶を共にすること、具体的には、授業に集中し、部活動で仲間の大切さを実感し、紫旗祭、紫の旗の祭りと書きますが、その紫旗祭という学校祭でクラスが一つになり、安積の空気を胸一杯吸い込み、安積という学校文化を3年間共有すること、これが安積で学ぶ最大の意義であり、そして、安積の誇り・プライドであると私は考えています。

3月末の新入生オリエンテーションにおいて第1学年主任（その時点では予定者でしたが）が「安積の生徒であることを誇るのではなく、安積高校から誇りとされる生徒になってほしい」との話がありましたが、安積へ入学し安高生であることに満足して胡座をかいているのではなく、真の安高生はどうあるべきかを考え、真の安高生になるために行動し続けること、具体的には、志を高く掲げて仲間と共に勉学に励み、部活動に一所懸命取り組むことが大切だということ、つまり、安高生に相応しいのは、「であること」ではなく、絶えず何かを「すること」なのだ、と私は考えています。

さて、安積の精神・スピリッツである「開拓者精神」「質実剛健」「文武両道」は、男女共学となって15年目の今も変わることなく、生徒諸君の進むべき道を照らし続けていますが、これは一朝一夕にできたものではなく、100年以上の長い時をかけて揺るぎないものになったものです。それらは、ただ何もせず得られるものではなく、常に

先輩達から学び取るものであり、そうしなければ伝統を受け継ぐことはできません。

歴代の安高生は、明治・大正・昭和、そして平成の各時代背景の下、「真の安高生は如何にあるべきか」「安積らしさとは何か」を絶えず自らに問いかけて検証し、自主自律の精神のもと、新たな伝統を創造してきたのであり、ここに安積の生徒の凄いところを私は感じます。

また、「質実剛健」という言葉は、真面目で飾り気がなく、たくましくしっかりしている安高生、自分の外見・外側を気にすることなく、自分自身の内側をしっかりと見つめて成長していく安高生にこそ相応しい言葉であります。

さらに、「文武両道」を実践するためには、かなりのエネルギーを必要とします。そして、何と言っても「タイムマネジメントと集中力」が鍵となります。つまり、限られた時間を上手に管理し、いかに集中して勉学に打ち込み、いかに密度の濃い練習で自らを鍛えるか、安積の教師集団は皆さんと常に真剣勝負をしながら、必ずや君たちをリードしてくれるはずであります。

新入生の皆さんは、「自主自律」という言葉をこれから繰り返し聞くことになるはずですが、これは他人や周りからの保護、干渉や制約などを受けず、自発的に自分自身で考えて行動し、規律・ルールに従って己を律することです。それは、教師から言われたことや与えられた課題だけをこなすのではなく、自分の進路目標実現のために何をなすべきかを自ら考えて行動することであり、人と会ったら挨拶をすること、家庭学習を毎日すること、人が嫌がることをしないこと、つまり、人間として高校生として、当たり前のことを当たり前にするということでもあります。

保護者の皆様には、お喜びもさぞかしのことと、心からお祝い申し上げます。私ども教職員一同は、新入生を迎える喜びとともに、責任の重さをこの両肩に感じています。これからの3年間、御協力、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

御来賓の皆様、本日は年度始めのお忙しい中、御臨席を賜り心より御礼を申し上げます。昨年本校は、130周年記念式典を始めとする様々な記念事業を進める中で、生徒が充実した学校生活を送ることができるよう、教育環境の整備に努めてきたところでありますが、今後とも安積高校に対し、深い御理解と温い御支援をお願い申し上げます。

終わりに、あの東日本大震災から4年1か月が過ぎようとしています。復旧・復興は少しずつ進んでいると考えますが、一方で、本県の小・中・高等学校・特別支援学校の大勢の児童生徒が、未だに県内外で避難生活を余儀なくされている現実があります。大震災以降、「ふくしまの復興に自分の学びを活かしたい。ふくしまのために何かをしたい」このように考える高校生が増えています。勿論、世界へ飛躍しようとしている生徒も大勢いますが、その場合でも、「3.11以降のふくしま」を心にとめて、できれば、最終的にはふるさと福島の地に足をしっかりつけて活躍してほしいと考えています。

第131期生の皆さんは、大震災の発生から1年が経ち、依然として不安な空気が漂う春に中学校に入学して3年間を過ごしました。皆さんはつらい体験を乗り越えてきた、或いはまさに乗り越えようとしています。いや、乗り越えようと未だにもがいている人もいるかも知れません。その体験は非常に貴重なものであり、むしろ皆さんが前に進んでいく原動力となるのではないのでしょうか。その得がたい経験を生かして、自分の夢を見つけ、その夢に向かって高い志を掲げてください。そして、その志を持ち続けて、安積の同期生と共に切磋琢磨し、安積の誇りを胸に抱いて、充実した高校生活を送ってください。

第131期生が安積の精神を体現した誇り高き安高生に成長していくことを期待するとともに、3年後の皆さんの輝く瞳と笑顔を思い描いて式辞と致します。

平成27年4月8日

福島県立安積高等学校長 久保田 範夫